

困難を乗り越えたい若きアスリート ⑤

絶望の淵で見いだしたのは野球

トップ・オブ・ザ・ワールド身障者野球世界大会

障害者野球 日本代表 **中井 三朗さん** (吹田市役所勤務)



世界一の男が、吹田にいます。11月に初めて開催された身障者野球の世界大会で、日本代表のセンターを守った中井三朗さん(27)は、吹田市役所の教育総務課に勤務する公務員。右腕に障害を持つが、ガッツとセンスで、世界制覇に貢献した。トリノ・オリンピック、野球のWBC、サッカー・ワールドカップなどなど、話題豊富な2006年のスポーツイベントを締めくくった若きアスリートの、「トップ・オブ・ザ・ワールド」に至る原動力を尋ねた。

(新聞うずみ火記者・吉岡雅史)

走攻守のカナメに「シンジラレナイ」

大きな拍手と声援に見守られて、中井さんはグラウンドを縦横無尽に駆け回った。打席に立てば、ボールを叩きつけ、しぶとく出塁してチャンスを広げる。守っても俊足をとばして、素早く落地点に。



衰えても、やめそうな気配は無い。

ひたむきさが、見る者の心に響く

現に、身障者球界には義足の選手

4カ国で競った第1回世界大会で日本は、台湾、韓国、アメリカとすべてコールドで撃破。中井さんも暗れ舞台で持味を発揮した。

「野球をやる者として、そのジャンルの中で頂点に立てたことは、最高の幸せです。それよりも嬉しかったのは、当日、たくさんの方が試合を見に来てくれて、興味を持ってくれたこと。そして、連盟のホームページに『ええもん見せてもらおうた』という声が多く寄せられたことです」

実際に見ていると「うまい選手やな」とホレホレする。自由が利かない右手をユニホームの中にしまっていることに気づくと、もう『シンジラレナイ』と叫ぶしかない。

中井さんは軟式野球の名門・大阪高校で投手兼外野手としてプレー。2年の夏、府大会でベスト8に入り、来年こそは全国大会出場を、と期した矢先に、バイク事故で右腕の自由を失った。「もう野球ができない」という絶望感に打ちひしがれた。

チームメイトの励みで もう一度グラウンドへ

ある日突然障害を抱えることになった思春期の少年の苦悩を、いったい誰が、ちゃんと理解できるだろうか。

中井さんは言った。「僕には野球があった」と。そして、彼の復帰をグラウンド

で待つ仲間たちがいた。チームメイトの励ましを受けて、3、4カ月後には部活動に復帰。翌年は、レギュラーは無理だが、守備や代走などで試合にも出て、大阪ベスト4と前年を上回る成績を収めた。

大学時代は地域のソフトボールチームに所属したが、それでは物足りなかった。専門学校で就職をしていた2002年の冬、障害者野球の存在を知り、強豪・神戸コスモスの門を叩く。より野球に集める環境を求め、吹田市役所の採用試験に挑戦し、難関をくぐり抜けた。

意志があるから道は開けた

意志があるから、道は開けた。そしてたどり着いたジャパンのユニホーム。神戸コスモスでも日本代表でも指揮を執った岩崎広司監督が「彼なら人前で堂々としゃべれると思うから」と、開会式で選手宣誓の大役を任せられた。

「一度あきらめた野球がもう一回できる。その喜びがあるから、ここまでやれた。野球がなかったら、ケガをしてから外にも出られなかったと思う。野球をやることで、僕は人間としてのプライドを保つことができるというから」

健常者チームの挑戦状 8割方は返り打ち

日本で生まれた障害者野球は、基本

した。「あきらめなければ、なんだってやれる」ということを、障害者スポーツには教えてくれる。

中井さんは、生まれが摂津、吹田に移り、大学は茨木、結婚して新居は豊中。淀川の北部と縁が深く、地元への愛着は強い。

「プレーできなくなったら、そのあとは、自分が生まれ育った地域を巻き込んで、北摂に身障者野球のチームを作りたい。障害で悩む人たちと、この喜びを分け合いたい」

絶望の淵で、中井さんに希望をもたらしてくれたのは野球だった。大好きな野球を通じて、青年の夢はどんどん膨らんでいく。

いねみせいじのヨコシマ日記



俺にもこれだけやれる。だから君にもできる